

口島に着いた。港には日の丸を揚げた引揚船（大端丸）が停泊していた。みんな泣きに泣いた。

船はジグザグ航行で（魚雷の浮遊を警戒して）三日ぐらいかかってやっと佐世保港に着いたのであった。（上陸は十月十四日）

申し遅れましたが私は引揚げまで支店長の斡旋で中国人経営の「長春貿易公司」で働かしていただき糊口をしのいでくれたことを感謝しております。

故郷に戻ってから、かつての同輩から教員にならぬかと親切にすすめて下さったが八年近くのハンデーもあり、また住宅等の問題等もあって見合わせることになる。

二十三年初め義兄の口添えて三菱鉱業（株）上芦別鉱業所 資材課に勤務することになった。

住宅も貸与され、その他配給物資、厚生福利面も比較的よかったことも三菱入りの理由でしょうか……定年退職を間近にして三菱鉱業の協立会社に転じ六十歳で職を退きました。いまは苦勞をかけた妻と二人で細々と年金で晩年を歩んでおります。

## 満蒙開拓に参加の動機

北海道 長倉直松

私は明治四十二年一月秋田県の山村の農家に生れ、兵役の義務を終えた翌年の昭和七年外務省巡查満州国勤務を希望し、十月に弘前市にて行われる採用試験の日を待っている矢先に、村役場の兵事係りが来訪国策重大事業として在郷軍人から満蒙開拓武装移民五百人募集することに成りましたからとすすめられました。

一刻も早く彼の地へ渡りたい希望を抱いていたときなので早速その方に決意を定め応募致し合格、岩手県六原道場にて三週間の基礎訓練も済ませ出発の日が待ち遠しい毎日でした。愈々出発渡満

東北六県、関東五県から木工・鍛工・醸造を含めた精鋭百九十五人出発に決定、予め各連隊区から軍服軍靴の支給を受けて出発に備えておりました。

愈々九月末日出発、宮城を遙拝、明治神宮参拝、意気

揚々神戸港を発ちました。

東支鉄道をハルビンに向って東進、途中北大宮の兵器廠にて各自小銃の外、機関銃四機、迫撃砲二基の支給を受け奥地にはいるほど危険と警告されておりましたので、兵器を身につけ心強くなりました。

十月三日夕暮れ目的の佳木斯市に着きました。匪賊接近の情報と夜の積荷下ろしは困難のため船内で一夜を過ごすことになり、深夜に至るや松花江対岸の鶴立県側から烈しい砲弾の攻撃二十数発を受け船舷に米塩等俵物を積み上げ防御幸い負傷者もなく済みました。

匪賊は槍を持って襲ってくる集団とばかり思っていたのに砲を所持していることにまったく驚き入りました。北滿は日増しに寒さが激しくなり丸型穀物倉庫四棟程を宿舎として、越冬することになりました。

二月十一日紀元節先遣隊現地へ

満洲国吉林軍百人の応援を得て五十人が先遣隊として入植予定地に向いました。私も機関銃分隊長として参加二月十四日六百人の匪賊が日本人の入植を拒否せんと古くから金鉱の町として栄えております駝腰子に集結中と

の情報が入りました。

急遽武装を整え深夜吉林軍の応援のもとに出発、敵の第十二線陣地をことなく通過、第三線において激しい交戦となり私の右に伏していた弾薬手の渡辺熊治氏（二十九歳福島県に妻子あり）が腹部貫通の重傷を負いました。匪賊を退散せしめ枯草を集めて焚き暖をとり手当しても効無く息を引き取りました。

火葬に附し金鉱街が眼下に見える丘に埋葬、墓標を建てねんごろに御冥福を祈りました。渡辺君こそ満蒙開拓第一次武装移民最初の犠牲者です。心から御冥福をお祈り申し上げます。

播種期を目前にして匪賊に包囲さる

昭和九年三月播種期を控えて着耕準備に追われている矢先、北滿一带に最も勢力を誇る匪賊の頭目で謝文東の統率する二千人の匪賊が第一次弥栄第二次千振の両団を中心に広範囲に包囲し、播種期を遅らせ開拓団に致命的な損害を与えんとする作戦のもとに頑強な抵抗を続けて一歩も譲らず、播種期の遅れは重大問題であり止むを得ず軍に要請協力を受けることになりました。

佳木斯駐屯の歩兵六十三連隊から連隊長飯坂大佐以下多数の将兵の応援を得て敵の包囲網を解くことが出来ました。しかしこの戦闘において飯坂大佐殿の尊い命が奪われたあとの悲しみは今になっても忘れることは出来ません。今改めて御冥福をお祈り申し上げます。

#### 建築班と家族招致

家族を招致するには先ず建築を急ぐ必要に迫られます。伐採班を組織して用材の豊富な奥地に小屋を建て作業開始、伐採搬出ともに良い成績を挙げておりました。

ところが深夜熟睡中百人ほどの匪賊に襲われ八人の犠牲者あり、一時伐採中止の破目に遭いましたが屈することなくますます警備を厳にし続行、建築も順調に進み昭和九年秋には第一回家族招致が実現となりました。家族の渡満で開拓地は一挙に活気が湧いて参りました。

農耕班は銃を携帯しばしば威嚇射撃をしての作業でしたが良い収穫を挙げる事が出来ました。

昭和十一年秋には全員家族招致が終わり、京都の東本願寺から優秀なる住職さんの派遣を賜わり、神社仏閣と行政教育施設が次々と整いましたが治安の方は依然とし

て安定せず、奥地の部落が襲われて死傷者の外兵器と家畜の略奪事件、佳木斯からの物資輸送車が襲われ土屋少尉死亡事件、建築用石炭運搬中警備員死亡、牛馬略奪事件等々、昭和十四年の末頃までの事件の数々書きつくせません。

翌十五年にいたり治安平穩となり十七年頃から生活基盤すべて整い不自由のない安定した生活ができるようになりました。

#### 結びに

昭和二十年となり戦争が益々深刻化していることを身にかけておりましたが、関東軍を全面的に信頼しておりました。日本本土が陥落しても満州だけは日ソ不可侵条約が固く結ばれておりますので安全なりと安易な気持ちでおりました。

終戦直前の七月二十五日思いもよらぬ開拓民の根こそぎ召集シベリヤ抑留酷使に堪え切れず逝かれた数多くの同志に心から御冥福を御祈り申し上げます。昭和二十二年ソ連から郷里の秋田に帰還二十三年安住の地を北海道に求め八十二歳の今日健康に恵まれ、満州で体験した開

拓精神を十二分に發揮出来たことに満足いたしております。

## 若き日の思い出

山形県 大山 きぬよ

昭和二十年四月二十一日、私達報国隊五十八人は家族その他大勢の人々に見送られて楯岡駅を出発した。

当時十六歳の最年少の組で家を離れることは初めての経験であったし、汽車の窓から顔を出しても胸が一杯で何も言えず、ただありったけの涙だった。

新潟港から大きな船に乗った。友達と甲板に上ってみたら、きらきら輝いていた赤や黄の新潟港の明かりがもうどこにもなく、真っ黒い海に私達に乗った船がただ一つあるだけだった。何も見えない。友達とそれこそ涙も声もかされるほど泣いた。どうしてこんなところに来てしまったんだろうと。

どこの家でも国のため一人ぐらいは戦争に行っている

のに、私の家では行っていないので、子供心にお国のためなら喜んで、と一人決心して来た私だったが、ボウと鳴るドラの音を聞いても淋しく思った。

赤い夕日の満州は汽車の窓から見ても山一つなく、どこまでもどこまでもはてなく続く大陸だった。

協和開拓団に着いたのは夕方、出迎えの皆さんがたくさんのゆで卵を持って来てごちそうして下さったのが強く印象に残っている。

私達報国隊五十八人の団体生活は規則正しく、毎日農耕の手伝いだったが、一週間交替の炊事当番だった。小麦粉や黒砂糖など一俵のままの袋や樽から取り出している料理で内地ではとても考えられないくらい何でも豊富だった。

ある日待ちに待った手紙が夕方薄暗くなってから届き、ランプの下で母の名前を見た瞬間、もう涙がぼろぼろ出て読むことができないほど嬉しかった。

八月十五日、無条件降伏の知らせがあったからは一変して想像もつかない苦しい生活の始まりとなった。

私は心の中で、私はどうなってもいい、うちのお年寄